だから嫌だと言ったのに。

kuro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
だから嫌だと言ったのに。

【Ｎコード】
Ｎ８５９３Ｙ

【作者名】
ｋｕｒｏ

【あらすじ】
意地っ張りな女と意地悪な男の攻防。

ツンデレＶＳうさんくさい

「絶対に嫌。死んだほうがまし。なんて言われようと私には無理！」

もう、これ以上ないって程の拒絶を見せてかれこれ２年。

私、早坂ゆうな２７歳。自分でも頑固な方だと思うが、彼はそれを上回っている。

「大丈夫。ゆうななら出来るよ。むしろゆうな以上の適役は見つからないね。そろそろ頷いてくれてもいいんじゃないかな？疲れない？そうやって怒ってばかりいたら早く歳をとってしまうよ。ほら、そろそろ三十路近いんだし。」

…余計なお世話だ。

口に出して言い返さないのは、倍になって言い負かされるのが分かっているからだ。それはもう、嫌というほどに。

幼馴染に生まれたのが運のつき。

川西豊、３２歳。こいつは昔から目障りな存在だった。

顔がいいのは認めよう。こいつのおば様は結婚引退するまで世界的なモデルで５３歳の今でも迫力ある美人さんだ。彼女のＤＮＡをうまく受け継いだらしく、子供の頃から綺麗な顔をしていた。

頭だっていいのも、しょうがないから認めてやる。そりゃあ、昔からこいつが努力してきたのは見てきたし、将来おじ様の会社を継が

せようという周囲の重い期待にこたえてきたんだから、大変な思いもしてきただろう。
みごとな外面なんかは、感服するくらい完璧だ。
…そのためのストレスを、私にぶつけなければ。

私はこいつがいなければもっと素直でいい子に育っていて、今頃結婚だってしていたに違いない。もしくは結婚できていなくとも、彼氏の一人や二人付き合っていたっておかしくないはず。
こいつは、自分が完璧を演じるために、私を利用したのだから。

そう、私は現在彼氏がいない。
…いや、正直にいおう。現在どころか過去だって一人も存在しないし、下手すれば未来だって危ぶまれる状況だ。
なぜなら、性格が悪いからだ！
…自分で言ってて痛々しいのは分かっている。でも事実。そして、それを自覚しているだけ自分はマシだと思いたい。

それもこれもこのやっかいな幼馴染のせいだ。
『全部が全部、僕のせいにされても困るよ。』
昔、そう言い返されたこともあるが、声を大にしていいたい。

全部じゃなくてもお前がわるい！！！！！！！…と。

そう、昔から口げんかじゃ言い負かされてきたから、変に負け癖が付いて卑屈になったのも。

こいつのファンの女から毎日のように嫌がらせを受けてきたから、初対面の女はみんな敵に見えて、挨拶代わりに睨んだり、意地悪を言ってしまう癖がついたのも。

こいつが同級生の友達グループで、賭けごとみたいに私を落とせるかゲームしていたのを知って、男性不信ぎみなのも。

完璧なこいつが近くにいるせいでどんなに努力してまあまあな結果をだしても誰にも認めてもらえなかったのも。

あれもこれもどれも。
ああ、どんどん思い出すたびにむかついてきた…！

「…さっきから聞いてる？ゆうなの顔、どんどん恐ろしくなっているんだけど、ハロウィン仕様？」

「生まれつきよ！！化け物みたいで悪かったわね！！！」

ちっ、反射的に言い返してしまった。私が噛み付くと、こいつはそれはそれは嬉しそうにニヤリと笑った。

「化け物みたいだなんてひどいこと、言ってないけどね。大丈夫、そんなに悪くない顔だよ。」

…味があって。
長年の付き合いのおかげか、今ではこいつが余計な一言を付け加えなくても、私の耳にはまるで心の会話が出来るかのように滑らかに続きが聞こえる。
まったく嬉しくないけど！
「…それはどうも。で、まだなにか用？」
大体、今日は土曜日で休日だ。せっかくの休みをこいつにつぶされるのはもったいない。さっさとお帰り願おう。
じろり、と不機嫌さを全面にだして、空気を読ませようとする私の努力は伝わらない。
こいつは更に楽しそうに目を細め、なれなれしくも私の肩に腕を乗せてきた。
「まだもなにも、まったく用は済んでいないよ。…僕も早く用件を済ませたいんだけど、こんなに引き伸ばされるなんて予予想外だったな。今日は泊まったほうがいいかい？」
「か・え・れ！用件は済んだのよ。無理ってもう何回も返事したでしょ？」
「ふふ、ゆうなは面白いことを言うね。僕はそんな返事を聞きにくるほど暇じゃないんだよ。時間を作ったからには、結果を出す。用件はＹＥＳを聞くまで終わらないよ。」
「…いや、そんなん無理だし、時間の無駄だよ…。」

誰か、こいつをどうにかしてくれ。
だからといって、うなずくのは絶対に無理。だって、こいつの要求というのが…

「だからさ、時間を無駄にしない為にも僕たち結婚するべきだね。」

ひいいいいいいっ！！！プロポーズされているのに、こんなに恐怖を感じるのって、なかなかないんじゃないだろうか。
そう、こいつはなにをとち狂ったのか2年前から熱心に結婚を迫るようになったのだ。

最初は軽いノリだったのに、日を追うごとに粘着質なそれに変わり、今では脅迫感まで漂うようになってしまったのだ。

私も始めは「また何の賭け？」と軽く受け流していたのに、今では隙を見せるのも恐ろしいと、全力で拒否するまでに成長した。

何を企んでいるのかは謎だが、きっと碌な事じゃないのは確実だ。
私が過去のアレコレをいまだに根に持っているのを知っているくせに、どの口が「結婚」だなんて言えるんだ！

警戒心ＭＡＸの私をよそに、こいつは相変わらず飄々とした態度で私の肩を抱く手に少し力を入れてきた。

「うーん、何が気に入らないかな？こんなに誠心誠意心を込めているのにねぇ。」

まるで、「どうしてわがままに育ってしまったんだ？」と親がよくいう台詞のように、自分勝手な言葉を吐くんだから、たまったもん

じゃない。
私にとって当然の気絶は、こいつにとって“素直になれない困った子”みたいな扱いになってしまうのだ。
このままではいかん、と私はキッと睨みつけるとこぶしを握りながら言い返した。

「だいたいね、なんで私とあんたが結婚なんて話になるの！？私たち付き合ってもいないし、お互いに愛の告白だってしていないんだから！なにを企んでいるのかは知りたくないから言わなくていいけど、私は結婚は相思相愛の相手じゃなきゃ絶対に嫌！あんととは死んでも無理！だいたい今まで散々私のこといじめてきたくせに、私が恨んでないなんて思わないでよね！嫌い！無理！言い負かそうとしても無…だ！」

ただ冷静に述べるつもりがなぜか恨みごとを吐いてしまい、気づいた時にはこいつを指差し鼻息荒く息継ぎなしで言い終えた後だった。
しかし語尾が弱い。

なぜならその間、こいつは眉のひとつも動かさずに…と思ったら、意外にも「嫌い」の単語のみピクリと一瞬反応し、その後ふわっと笑顔になったのだ！…怖い！！怖すぎる！完璧な笑顔なのになんでこんなに背筋が凍るの！？

さっきの勢いがどこへやら。すっかり震える子ウサギちゃんになった私（たとえよ！たとえ！！）を、捕食しようとする肉食獣の目が光った。

「うん、よくわかったよ。これは説得しようと思っても無駄みたいだね。」

てっきりこんこんと意地悪を言われると思ったのに、返ってきたのはそんな言葉。想定外な展開にうっかり目を輝かせた瞬間、私は自分の失敗を悟る。

「そ、…そう？わかってくれたならうれしいな～…あの、肩も離してくれるとさらに嬉しい…」

ええ、なにか地雷をふんだのはわかった。わかったから！さっきから私の肩を抱く腕に力を込めてギリギリと痛めつけるのはやめて！！

「喜んでもらえてうれしいよ。肩も離そう。」

にっこり。

それはそれは完璧な笑顔を浮かべたこいつは、肩を離した一瞬の隙に逃げようとした私をいとも簡単に捕まえて、今度は背中から抱き込んできた！

「んひゃっ！！」

良くわからないうちに耳やら項やらを舐められ、私を拘束したまま器用にその手は体を彷徨いだした！

「ちょっ！たんま！！…んっ！ごめんなさい！許して！！」

全力で抵抗しているのに、まるでこいつの動きを助けるかのように私着ている服がするすると脱がされていく。

ちょっと！なんでそんなに楽しそうに犯罪してるの！！

くすぐったさと驚きで涙目になりながら振り向くと、眼前には満面の笑み。

「何を許して欲しいのかな？…これのこと？」
こいつは嬉しそうに尋ねると、いつの間にか下着の下にもぐりこんだ手でふにゃりと一部を揉みだした！
「あんっ！…ちょ！やめてよ！」
「ふふ、かわいい声だね。でもさっき僕の言うこともきいてもらえなかったし、仕返しにゆうなの言うこともきかないよ。」
「嫌だってば～～～！！！！」

…はい。
もう何もいいません。というか、言えないことをされちゃって。それがなぜか両親や周りの人にもばれてしまって。なぜか、こいつが責任をとるという形に。ええ、なぜか。なぜだ。
「…絶対嫌だって言ったのに、ひどい。」

周りを固められて、もう拒絶できない状況に追い詰められた私は、一枚の用紙を前に最後の悪あがきをしてみる。こんなに抵抗しているのに、なんでこいつはこんなに嬉しそうなんだろう。

「うん、ごめんね。でもずっとゆうなを愛していたのに、ゆうなが冷たいから抑えきれなかったよ。」

……。

ん？いまなんていった？

「すごくゆうなを愛しているんだ。両思いだし、結婚してくれるよね？」

「…なにそれ。どこが両思いよ。」

し、信じられない。意味わかんない状況でいきなり告白されたかと思いきや、私の気持ちまで決め付けられるなんて。

変な緊張にペンを握る手に汗がにじむ。

なんで、なんで、なんで、私がこいつを好きだなんて思い込んでるの？

私の混乱なんて気にも留めずに飄々とした態度でペンを進めるこいつを睨む。

「ゆうなは天邪鬼だからな。態度ばればれ。」

「なっ！な、な、な…！！！」

狼狽しすぎて頭が真っ白になる。
言葉も発せずにいる私に、最近気軽にしてくるキスを頬に落とすと得意の笑顔でとどめを刺された。
「口で嫌だって言ってても、態度は好意がだだもれだったからね。」
僕も愛してるよ、とささやかれると、私は何も反撃できなかった。
「…なによ、嫌って言ってるじゃない。」
そう、昔からこのむかつく幼馴染が大好きでしょうがなかった私の、唯一の抵抗。
それすらもこいつが「愛してる」なんて一言くれれば脆く崩れてしまうのだ。
「まぁ、それでも散々じらされたけどね？」
苦笑しながら、しょんぼりとした私を抱きしめるとそんならしくない言葉を言うから、つい私もらしくない言葉を吐いてしまう。
「…嫌よ嫌よも好きのうち、でしょ。」
好き、の台詞がでた瞬間、こいつは時間がとまったかのように目を見開いたまま固まって、同時に抱きしめられていた私の動きも封じられた。
「…もっかい言って？ゆうな。」
「絶対、嫌。」

「うん、僕も愛しているよ。」

あー。こいつにも自動翻訳機が備わっているみたい。

「だから、嫌だってば。」

「うん。ありがとう。」

はたから見れば意味不明で不可解な会話をしながら、お互い婚姻届に記入する。

私の気持ちがばればれなのは自覚済みだったんだから、かわいい抵抗してみたかったんだ！

それが意外と効果あってけっこう時間かかったけど、言い寄られるのがちょっと嬉しかった。だって、普段私が優位に立てるものなんてまったく皆無なんだから！

が。変な翻訳機能のついたこいつに、今後の結婚生活でまた振り回されるのはまだ先の話だった。

だから、嫌っていっているのに！！！！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8593y/

だから嫌だと言ったのに。

2011年11月25日20時54分発行